

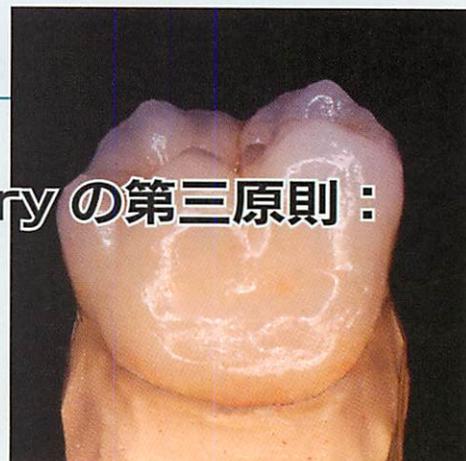
## 第6回 Bioesthetic Dentistryの第三原則： 遺伝的歯冠形態

荒谷昌利

埼玉県開業 荒谷デンタルクリニック  
連絡先：〒344-0061 埼玉県春日部市粕壁1-9-46

Part6. Genetic Tooth Form

Masatoshi Araya



連載予定	第1回	顎口腔システム
	第2回	予備的咬合診査
	第3回	Bioesthetic Dentistryの第一原則：Stable Condylar Position (SCP)
	第4回	下顎の回避パターン(Avoidance Pattern) とコンタクトガイダンス(Contact Guidance：CTG)
	第5回	Bioesthetic Dentistryの第二原則：固有感覚性アンテリアガイダンス(Proprioceptive Anterior Guidance：PAG)の確立
	第6回	Bioesthetic Dentistryの第三原則：遺伝的歯冠形態(Genetic Tooth Form) ←
	第7回(特別企画)	Bioesthetic Dentistryにおけるフルマウス・リコンストラクション

### はじめに

科学とは基本的に「こうあるべきである」という意見を議論する学問ではなく、「こうである」という事実を明らかにする学問である。ここでいう常識的な事実の意味とは、われわれが確実に真だと知るものである。しかし、あることが確実に真であることをわれわれはどのように知ることができるのだろうか。自然はそれを知るための情報を簡単には与えてくれない。われわれにできることは、自然のなかで最善の観察をし、適切な問いを立て、その内容を検証することだけである。

したがって、自然科学の一分野である生物学における事実とは、十分に検証された生体の観察内容である。この定義がいかに曖昧であっても、これ以上の特徴づけは科学だけではできない。覚えておくべきことは、われわれは知識や権威そして信念というレンズを通して、同じ現象について異なる見方をする可能性があること、そして自然は、われわれの“こ

うあるべきである”という思惑をしばしば裏切るということである。

### 1. 生物学における形態と機能の関係

いかに歯冠修復が審美的とされるような外観であっても、それが顎口腔システムを破壊するようなものであれば、それは機能的に美しくないどころか、むしろ醜悪だといえるだろう。患者に対して、良好な機能を伴った審美を与えるのが今日の歯科医学の課題であることは疑いのないことである。良好な機能を確認するために、われわれはそれに付随する形態についても考えないわけにはいかない。なぜなら、機能と形態には非常に密接な関係が存在すると考えられるからである。

形態と機能の関係に関しては、19世紀後期のシカゴにおける建築工学の分野で活躍し、現代の超高層ビル技術の基礎を築いた建築家、Louis Henri Sullivanの、「形態は機能に従う」という言葉が有名であ